発表 No.5（前半・room5）　　**実践発表**

JSL カリキュラムを応用したリライト教材による国語授業の実践
―日本語指導が必要な生徒を含むインクルーシブな教育へ向けて―

上野　洋次　（埼玉県立狭山緑陽高等学校）

１．実践の場の特徴

筆者が勤務する単位制・二部制・総合学科の定時制高等学校には、日本語指導が必要な生徒（以下、JSL 生徒）が約 1 割在籍している。非常勤の日本語指導員である「多文化共生推進員」による個別の日本語指導や、授業への入り込み指導が行われている他、夜間部の 1 年次「国語総合」の授業における取り出し授業を行っている。これらの取り組みをさらに広げていくことも重要であるが、すべての授業に対して入り込み指導や取り出し指導を行うことは難しい。よって、在籍級の授業を、JSL 生徒がより理解しやすく、参加しやすいものにしていく必要がある。

本実践では JSL 生徒 3 名（いずれも中国出身・初級終了程度）を含む夜間部の 2 年次生徒 31 名を対象に「国語総合」の授業を行った。対象となる JSL 生徒は、日常生活とは異なる、授業や学習場面での使用言語、つまり「学習言語」の面での困難を抱えていると思われる。語彙や文法における困難もあるが、それを個別の指導で補い、内容をおおまかに理解したとしても、特に記述問題などで､設問に対しての答え方がわからず､評価につながらないことが多いと感じている。しかし、語彙の不足や、記述問題の答え方がわからないという点では、日本語を母語とする生徒（以下、JNL 生徒）でも同様の困難さを抱えていることがある。特に筆者の勤務校のような定時制高校では、義務教育段階で不登校を経験している等、様々な理由で学年相当の学習言語能力が身についていない生徒は多いと感じる。

そこで、JSL カリキュラム[1)]を応用したリライト教材を用いた授業を、JSL 生徒だけではなく、在籍級においてインクルーシブな形で実施することが、JSL 生徒に対する取り出し授業だけではなく、在籍級での授業の改善に資するものとなると考えた。

２．具体的な実践の内容とその過程

2.1 実践の目標

上記をふまえ､教科の目標としては｢小説教材に特有である虚構世界の様子や出来事の推移を、叙述を基に的確に捉える。｣、｢本文とリライト教材の比較により、本文の語句の理解を深める。｣、日本語の目標としては､｢読解の設問に対して､結びを工夫して解答を書くことができる。｣を JSL 生徒、JNL 生徒共通の目標として設定した。

2.2 実践の内容

本実践では、｢国語総合｣の教科書教材である、｢夢十夜　第一夜｣（夏目漱石）の自作による全文リライト教材と、それを基にした設問を用意し、45 分授業を 2 回実施して、その読解の指導を行った。

リライトは、光本・岡本（2016）を参考に、①主述の関係等を明確にするために、主語を補うこと、②語彙は、動作化や視覚化できるものをできるだけ使用し、抽象的な語彙や使用頻度の低い語彙等を使う場合は注を付すこと､③文体は敬体を使用すること､④一文をできるだけ短くし、単文を中心とすること、⑤文節を意識して、分かち書きや行換えをすること、⑥漢字にはルビを振ることを基準に行った。対象とする JSL 生徒がいずれも中国出身であることから、漢字の使用

を減らしたり、横書きにしたりはしなかった。

設問は、登場人物の心情や行動の理由を問う記述問題を中心に、表現技法についての知識を問う問題なども用意した。記述問題は、まずはひな形を提示し、穴埋め方式で解答の仕方を明示的学ばせたうえで、最終的には理由を問われた場合「～から。」という結びで答える等、記述問題への解答を行うスキルが身につくよう留意した。また、問題文も敬体を用い、わかりやすい表現となるよう留意した。

授業は、作者や作品についての基本的な情報を導入したうえで、3人から4人のグループを編成し、教え合いながら設問に取り組ませた。その後、全体に対して問題の解説を行った。また、授業内では十分な時間が取れなかったが、リライト教材と教科書本文を比較し、内容や語彙を確認することを指示した。

また、授業の数日後に実施した考査において、リライト教材ではなく、教科書本文とそれを基にした設問（問題文は常体）を課した。ただし、授業で扱ったリライト教材と、教科書本文の対応する部分に傍線を引き、設問も表現は違うが、授業で扱った問題と同じ考え方や表現で解答できるものになるよう留意した。

３．考察

授業では、JSL生徒や、JNL生徒で普段の授業で困難を抱えている生徒を含め、ほとんどの生徒が教え合いの活動に参加することができた。特に、リライト本文中の語を、活用させて穴埋めする問題や、「擬人法」等の表現技法について知識を問う問題では、JSL生徒が教える側になることもあった。これは、少なくとも今までの国語授業では見られなかった点である。JSL生徒に対しての日本語指導や、母国での学習の中で既習の内容を把握し関連付けることで、より主体的な参加を促すことができる可能性を感じた。

考査後に行った生徒のアンケート評価で、「リライト教材を使った授業はわかりやすいと思いますか」、「リライト教材を使った授業を今後も受けたいと思いますか」という問いに対し、それぞれ「思う」、または「どちらかというと思う」という好意的評価が 80%を超えたことから、リライト教材に対しては、JSL生徒だけではなく、JNL生徒も、おおむね好意的に評価したと言える。

また、考査においては、31人中30人の生徒が、理由を問う記述問題に対して「～から。」という形で答えるなど、記述問題に対して正しい結びを用いた解答を少なくとも一つの問題に対して行った。さらに、内容をふまえた正答率も高かった。これ以前の考査で同様の調査を行ったわけではないため比較はできないが、教科の目標、日本語の目標ともに高いレベルで達成できたと考えている。

これらにより、リライト教材を用いた授業を、JNL生徒を含めた在籍級で行う有効性はあると考えた。より抽象的な語彙の理解が求められる評論教材等への応用は課題であると考える。

注）

１）文部科学省が平成13年度から平成15年度にかけて開発した、日本語指導と教科指導の統合カリキュラム。小学生用と中学生用が公開されている。本実践では、高校生を対象とし、JSL生徒以外にも実施するという点で、「応用」とした。

【引用文献】

光本聰江・岡本淑明編著（2016）『外国人・特別支援　児童生徒を教えるためのリライト教材（改訂2版』ふくろう出版